

第7篇 資本の蓄積過程 第23章 資本主義的蓄積の一般的法則

第5節 資本主義的蓄積の一般的法則の例解 (例をあげて具体的に説明、解釈する)

a 1846-1866年のイギリス

○この節は、資本主義的蓄積に関する一般的法則をイギリスの政府統計資料や報告書などを用いて実証する内容。①1846年～1866年のイギリス、②イギリス工業労働者階級の低賃金層、③移動民、④恐慌が労働者階級の最高給部分に及ぼす影響、⑤イギリスの農業プロレタリアート、⑥アイルランドの6項にわたり詳細に説く。

236頁 1846年から1866年までの20年間のイギリスは、資本主義的蓄積の研究にとって好都合な時期。-資本主義が典型的な発展をとげた19世紀中頃のイギリス-その実例-労働者階級の状態がいかなるものか-を提供している。

この時期は、あたかも“フォルトゥナトウス”の財布が見出されたかのようなものである。



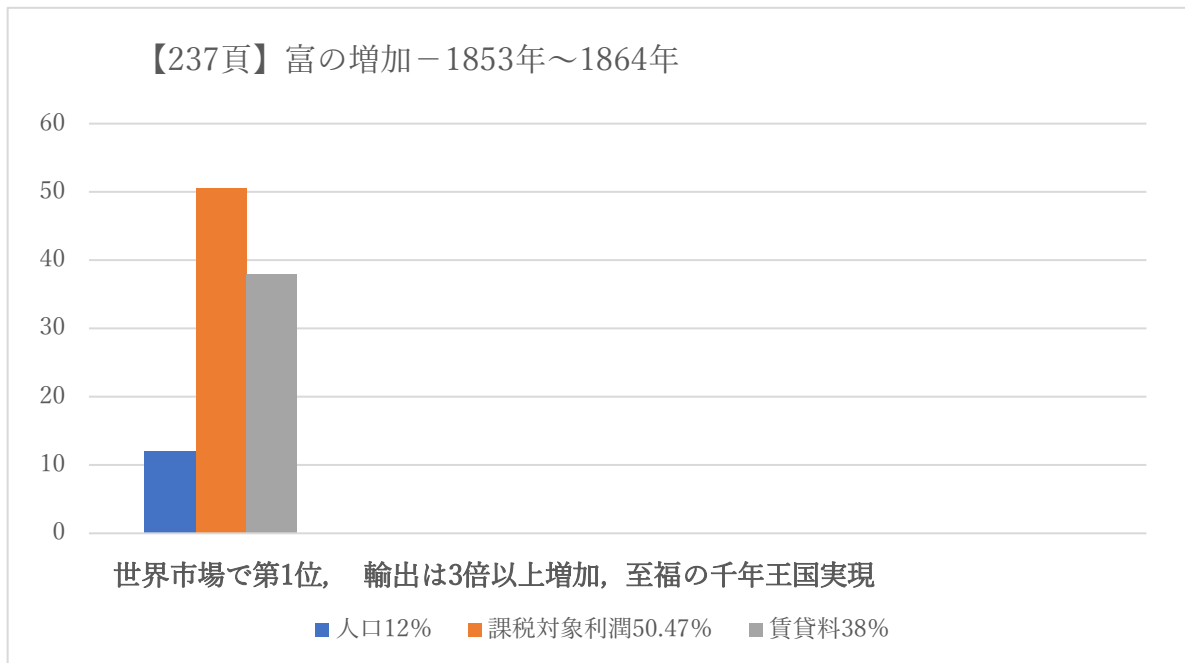
フォルトゥーナ - Wikipedia

運命の車輪を司り、人々の運命を決めるといふ。英語の「Fortune」の語源とされ、ギリシア神話のテュケー (Tyche)に相当する。

運命を操るための舵を携えており、運命が定まらないことを象徴する不安定な球体に乗る、幸運の逃げやすさを象徴する羽根の生えた靴を履き、幸福が満ちることのないことを象徴する底の抜けた壺を持っている。

また、チャンスは後からでは掴めないということを示しているため、フォルトゥーナには後ろ髪がなく前髪しかないとされているが、最近ではすべての髪を前で束ね

ているイメージに変わっている。



241 頁 イギリスの戸籍長官の次のような凱歌…「人口は急激に増加したが、産業と富の進展には、追いつかなかった。」と、

蓄積とともに資本の集積と集中が生じ、小規模（小借地）農業者は急激に減少し、大規模借地農場に合併され、巨額な相続財産も年々増加した。

一方、産業の直接の当事者で富の生産者である労働者階級に目を転じて見ると、政治家グラッドストーン（後の英国首相）は言う、

1843 年 2 月 13 日下院にて、
 人民の消費力が減少し、労働階級の欠乏と貧困とが増加しているのに、それと同時に、上層階級における不断の富の蓄積と資本の不断の増大とが生じている
 ということは、この国の社会状態の最も憂鬱な特徴の一つである。

20 年後の 1863 年 4 月 16 日予算案提出演説で、

- ・ 1842 年から 1852 年までに課税所得は、 ➡ 6%増加した
- ・ 1853 年から 1861 年までの 8 年間には、
 1853 年を基準にすれば課税可能な所得は ➡ 20%増大した

この恍惚とさせる富と力の増加は…全く有産階級に限られているが、しかし、それは一般的消費品を低廉にするのであるから、労働者人口においても、間接の利益でなければならない、
富者はますます富裕になったが、貧者もまた貧の度を減じた。貧窮の極度が軽減されたとは、私は敢えて言わない。(グラッドストーン)

242 頁 上記のグラッドストーンに対するマルクスの批判—しかし労働者階級は、有産階級のために「恍惚とさせる富と力の増加」を生産したのに比例して「貧の度を減じた」にすぎないのであれば、それは相対的には依然として貧乏なのである。

それどころか、(ロンドン孤児院の公式統計)生活手段の価格は20%も騰貴したのであるから労働者階級は、かえって、その貧困と欠乏を増大したのである。

245 頁 労働者階級が有産階級のために「恍惚とさせる富と力の増加」をつくり出した経過は、前篇(労働日、機械装置)で明らかにした。その際、我々が主に取扱ったのは、その社会的機能を演じつつある(労働をつうじて富を生み出している)労働者であった。但し、蓄積の法則を明らかにするには、作業場・工場の外の労働者の食、住などの状態を考察する必要がある。ここでは後に、工業労働者、農業労働者をみることにする。

その前に、公認の貧民名簿によるとイングランドでは、

1855年	85万1,369人
1856年	87万7,767人
1865年	97万1,433人
1861年～1865年	アメリカ南北戦争の結果、綿花飢饉
1863年	107万9,382人—膨れ上がる
1864年	101万4,978人

1866年の恐慌でロンドンの貧民の増加は1866年時点、19.5%増加(1865年比)、24.4%増加(1864年比)

1867年の最初の数箇月の貧民の増加率は、1866年と比較して大きかった。
貧民統計の分析時に、ふたつの点が重視されるべき。①貧民群の干満運動は、産業循環の周期的時期転換を反映する。②資本の蓄積とともに階級闘争と、従って労働者の自意識とが発展するにつれて、被救護貧民の現実の範囲に関して、政府の統計はますます欺瞞的になる。

b イギリス工業労働者階級の低賃金層

・世界の人口も 18 世紀以降、農業から産業社会に移行するに伴い人類史始まって以来のスピードで増加しはじめる。

・イギリスは世界経済の中枢をなし「世界の工場」「世界の銀行」となる。マンチェスター、バーミンガム、グラスゴーは商工業都市として、リヴァプールは港湾都市として急成長する。

これらの地方都市はいずれも 1750 年に人口 2 万人ほどだったが、1850 年に 20 万人～40 万人ほど、100 年の間 10 倍から 20 倍に増加。

ロンドン（金融と商業、政治の中心地）も人口約 70 万人から 240 万人に増加。（イーストエンドがスラムとなる。）

・イギリスにおける人口急増は、単に人間が増えただけではなく、結果的に人口構成を変えてしまった。古代・中世から近世のはじめまで約 80% の人が農村に住み、農業を営んでいた。しかし、18 世紀から 19 世紀にかけて農業人口が急激に減少する。1760 年約 70% が 1800 年に 36%、1830 年 25%、1850 年 22% へと低下している。

247 頁 枢密院から委嘱されたドクター・スミスは「最も健康で比較的の良い境遇の家族（調査の原則）」に栄養摂取状態を調査する。対象の都市労働者の 6 職種の内、飢餓病を発症する絶対的最低限度をわずかに超過したのは 1 種だけ。2 種で 2 栄養素含有食物不足。内 1 種は、はなはだしく不足していた。住宅の状態について、生産手段の集中が大量であればあるほど、それに応じて同じ空間における労働者（家族等）の稠密・密集も、ますます甚だしく、従って資本主義的蓄積が急速であるほど、労働者の住宅状態はますます悲惨になると述べている。

参考文献

「イギリス史 10 講」岩波新書/近藤和彦著

「イギリス帝国の歴史」中公新書/秋田茂著

「イギリス近代史講義」講談社現代新書/川北稔著